

勤務医部会だより

「近頃の若い者」



幹事 吉原 基
(公立西知多総合病院 院長)

このコラムの執筆も3回目となった。医療に関することであればなんでもよいということで、医療からは少しずれるかもしれないが、若手医師の指導について少し書いてみたい。

さて、ついつい使ってしまう言葉に「近頃の若い者」がある。確かに、自分の若いころに比べると、近頃の若い医師は大分違うように感じる。

まず一番に感じるのは、みんな優秀である。自分の学生時代は、授業や実習をさぼって、スキーやバスケットばかりやっていた。試験も、追試・追々試どころか、5、6回目の試験でやっと通してもらうこともあり、留年する学生はほとんどおらず、内科の卒試と国試だけ通ればよいと言われていたと記憶している。それに対して、今の大学は出席も厳しく、チェックポイントがあり進級も厳しくなっていると聞いている。おそらくは、卒業した時点での知識量は月と鰐ほどの違いがあるのだと思う。

医師になってからも、情報の収集能力が高く、学会発表の準備や抄読会をやらせても、自分の若いころと比較して、比べものにならないくらい完成度の高いものを持ってくる。もちろん我々の時代は、インターネットもChat GPTもなかったわけで、英語の論文なんて取り寄せようものなら、時間とお金がすごく掛かって簡単には読めない時代だった。技術の進歩が大きく影響していることは事実であろう。しかし、それを差し引いたとしても、言われたことを、無難にこなしてくる能力はかなり高いと思う（もしかしたら、AIがほとんどやってくれているのかもしれないが、それを使いこなすのも能力である）。

ただ、手術の指導をしていて感じることは、定型的手術は上手にこなすのに、少しイレギュラーなことが起きたときの、対応能力が低いように思う。パターンとして認識・記憶はしているが、なぜその手技を行うかを考えていないのではないかと感じる。そこで私は、手術中に、自分が行っていることをど

ういう理屈でやっているかを問いただすようにしている。しかし、まともな答えが返ってくることはほとんどない。答えが返ってくるならまだよい方で、何の答えも返ってこないことがほとんどである。

おそらく、煙たがられていると思うが、自分が上の立場になった時にこの訓練を行っていないと苦勞すると思い、口を酸っぱくして言っている。映画「燃えよドラゴン」の中でのブルース・リーの名台詞に“Don't think, feel.”というものがある。ここから頂いて“Don't feel, think.”などと言って指導しているが、この元ネタを知っている若者はだれもおらず、いつも滑っている。

今思い出してみると、自分が外科医になりたての頃は、「お前、何にも知らないな」と、よく言われていたように思う。当時は知識を得るすべがあまりなかったもので、どうしても自分で考えてやっていかなくてはならず、考える癖がついたのかもしれない。また考える時間もあったように思う。

そのころ私も、上司から「近頃の若い者は」と言われたり、「俺が若かった頃は」と武勇伝を聞かされると、反発心をもって、「時代が違います」と心の中でつぶやいていた記憶がある。もしかすると、これだけ情報が簡単に入る時代には、私の指導法は間違っているのかもしれないと考えてしまう。

この文章を書いていること自体、「近頃の若い者は」と考えている自分がいて、自分は時代遅れであることを認めていることになるのではと感じる。若者に媚び諂い、合わせる必要はないが、自分を少しずつアップデートして、今の時代に合わせていく努力は必要なのであろう。

でも、私のように「近頃の若い者は」と言っている者はまだよいのかもしれない。これは、自分が「近頃の若い者」とはずれていることを自覚していることの表れだからだ。一番問題なのは「近頃の若い者」とすら感じず、自分が今の時代からずれていることを認識せずに、自分の価値観が今の時代も通じると思って押し付けている者なのかもしれない。

「近頃の若い者は」という言葉を発してしまったときは、立ち止まって自分の考え方に疑問を持ち、アップデートするための警告だと考えていこうと思う。